

はじめに沈黙と闇があった。それから、鈴の音が木霊する。客席内の前列中央部を囲むように、10人の声明家が忽然と現れ、厳かにその詞を謡う。声明家の一群は鈴の打音とともに舞台上へと移り、往還し、弧を描きながら、それ自身が移動する発音体となって音響の淀みを織りなしていく。声明の澄んだ共鳴を縫うかのように、管弦楽団の打楽器群の金属音が起こり、弦楽器群の不協和音がその残響を引き継ぐ。ハープや笙が高次倍音の帳を揺らし、竜笛の旋律が泳ぐ。いつしか、厚手の護符が撒かれ葉音が模倣されると、波濤のような銅鑼の重厚な打音が場内を満たす。その余韻から、声明、雅楽、管弦楽団の渾然一体となった響きが顕われ、鮮やかな橙の衣裳を纏った舞人が久遠の舞をみせる。「声明交響II [オーケストラ・アンサンブル金沢 ヴァージョン]」(石井眞木)においては、日本という孤島を舞台に中国とヨーロッパという2大陸の音楽が邂逅する壮大なスペクタクルが展開された。声明、雅楽、管弦楽団による多層的な響きのなかにも、各パートの空間配置が鮮明に描き出され、初夏にふさわしい清浄感のある演奏となった。

そして、軽やかなトゥッティ、折り重なるさざめき、歓喜の予兆。「交響曲第7番」(L.V. ベートーヴェン)

において、その第1楽章の序奏がユーモラスに、確かさをもって示される。「舞踏の聖化」とW.ワーグナーにより称された第2楽章では、刻々と弾かれる律動を背景に、弦楽器群と木管群等のユニゾンからなる牧歌的な旋律が生まれては、消えていく。各楽器群による動機の提示とその反復による総和の対比が鮮やかであった第3楽章に続き、第4楽章では規律的な統一感のなかで、金管群等や打楽器群等の躍動する動機が歓びの旋律に生の息吹を与えていった。

アンコール、または<東京の夏>へのオマージュとして、「ワルツ～他人の顔」(武満 徹)が指揮者より贈られる。その感傷的なシャンソン風の小品において、不協和音の織りなす旋律が円舞曲の軽やかな律動にあてどなく惑う。一連の作品とともに聴くと、あたかも「交響曲第7番」での多様な律動に「声明交響II」での声明の断片が漂っているかのようであった。

本プログラムでは、声明、雅楽、ウィーン古典派、タケミツという日本における芸術音楽の歴史の標柱が示された。<東京の夏>はある私秘的なポストリユードとともに、本音楽祭の最後のプレリユードを奏でることとなった。■

第25回<東京の夏>音楽祭 2009 日本の声・日本の音 (2009年6月29日)

<オープニングコンサート>井上道義&オーケストラ・アンサンブル金沢

井上道義(指揮), オーケストラ・アンサンブル金沢, 東京楽所(雅楽/舞楽), 天台声明音律研究会(声明)

東京オペラシティコンサートホール: タケミツメモリアル [東京都新宿区]

①石井眞木: 声明交響II (オーケストラ・アンサンブル金沢 ヴァージョン),

②L.V. ベートーヴェン: 交響曲第7番 イ長調 Op.92